

〔研究ノート〕

西南日本における細石刃文化の起源と展開

島 立 桂

挿図目次

第1図 中国の細石刃文化遺跡分布図	224
-------------------	-----

表目次

第1表 中国の細石刃文化遺跡組成表	225
-------------------	-----

1. はじめに

旧石器時代の終末期になると、日本列島の全域に細石刃文化が展開する。この細石刃文化は、周知のとおり、東北日本に分布の中心をもち、湧別技法に代表される楔形細石刃核や荒屋型彫器を指標とする一群と、西南日本に分布の中心をもち、野岳－休場型細石刃核を指標とする一群にわけられる。前者は、1950年代における新潟県荒屋遺跡や北海道札滑遺跡の調査研究以来、中国東北部やシベリア地域との共通点が指摘され、大陸起源であることが定説となっている。しかし、後者の由来については、長野県矢出川遺跡の調査にはじまる細石刃文化研究の初期より数々の論考が提示されてきたが、大陸起源説と日本列島自生説があり、今なお解決していない。そこで、本稿では西南日本に広がる細石刃文化の起源を考えてみたいと思う。

まず、西南日本における細石刃文化の起源が、現状ではどのように認識されているのか、整理したい。

日本列島自生説には、①ナイフ形石器文化の終末期になると、ナイフ形石器やその素材である縦長剥片が小型になる傾向にあり、その延長線上に細石刃を位置づけ、縦長剥片石核がじょじょに野岳－休場型細石刃核へ変化したとみる説（林 1970、加藤晋 1984）、②湧別技法をもつ北方系の細石刃文化の南下に触発され、在来の技術（小型の縦長剥片剥離技術）の応用型として野岳－休場型細石刃核が生み出されたとする説（小林 1970、1986、稲田 1986）が代表的である。①・②とも、ナイフ形石器文化終末期に顕著な小型の縦長剥片石核と野岳－休場型細石刃核を関連づけている点で共通する。

一方、大陸起源による渡来説は、小畑弘己氏が中国南半部における細石刃文化の資料を紹介し、西南日本との関連を説いたもの（小畑 1989）以外に、具体例を分析した論考は少なく、漠然と大陸より細石刃文化がもたらされたと述べられたものが多い。

そこで、次の3項目について検討を行う。

a、西南日本各地において、野岳－休場型細石刃核を指標とする細石刃文化（以下、西南日本型細石刃文化とする）と、それに先行する石器文化との間に技術的な関連があるか（日本列島自生説の①、②の成立の可否）。

b、湧別技法をもつ北方系の細石刃文化（以下、東北日本型細石刃文化とする）が、西南日本型細石刃文化の主要な分布域である関東・中部地方に南下した時期はいつか。それは野岳－休場型細石刃核の出現以前なのか、以後なのか（日本列島自生説の②の成立の可否）。

c、野岳－休場型細石刃核の類例が中国大陸に存在するか（大陸起源説成立の可否）。

以上の検討により、西南日本型細石刃文化の由来を知る手がかりが得られるのではないかと思う。

2. 西南日本型細石刃文化と先行石器文化との関連について

西南日本の細石刃核をみると、九州地方から関東地方に至るまで、疎密の差はあるものの、稜柱形の野岳一休場型と舟底型をした船野型が広く分布する。野岳一休場型は、小型の礫、あるいは不定型厚手の剥片を素材とし、作業面から背面にむけて傾斜する打面を設け、水平、垂直方向の調整によって石核の原形をつくるものである。打面には、作業面に接して細かな調整が施される。また、作業面上端に頭部調整がなされる。細石刃の剥離は、石核全周の1/4程度の範囲で、作業の進行に応じて打面・作業面の再生や転移が行われる（鈴木 1971）。使用石材は、黒曜石が最も多く、これにチャートや凝灰岩、ガラス質安山岩などがある。一方、船野型は、大・中型で不定型厚手の剥片を素材とし、平坦な主要剥離面を打面として側面調整を施し、全形を舟底形に整えるものである。打面調整はみられないが、頭部調整は実施される。作業の進行にしたがって、作業面の再生や転移が行われる（橘 1973）。使用石材は、流紋岩や凝灰岩、チャートなどがある。以上のように、両細石刃核は、素材の形状、細石刃剥離にいたるまでの石核成形過程、石核再生（打面再生・作業面再生）、石材など、多くの点で異なる。したがって、一方から他方への漸移的变化を考えることはできない。しかし、両細石刃核を含む石器群は、細石刃の形態や石器組成、各石器の素材生産技術が共通し、これに対峙する東北日本型細石刃文化とは大きく異なることから、ここでは同一石器文化とする。

さて、西南日本各地における細石刃核の内容を概観すると、地域ごとの特性が認められる。例えば、九州地方をみると、西北九州（長崎県、佐賀県）では黒曜石製の野岳一休場型が圧倒的に多く、船野型はほとんどみられない。一方、東九州（大分県、宮崎県）では流紋岩製の船野型が多い。瀬戸内地方では、サヌカイト製で板状の剥片を素材とする細石刃核（井島II型）が主流を占め、典型的な野岳一休場型や船野型は少ない。中部地方をみると、東海地方（岐阜県、愛知県、静岡県）では、頁岩やチャートを用いた船野型が目立ち、中部高地（長野県）では黒曜石製の野岳一休場型が多い。このように、細石刃核の分布をみても、地域ごとに偏りがある。南関東地方のように、細石刃核の型式差が時期差を示すことも予想されるが（鈴木 1984、堤 1987）、それだけでは解決できない。黒曜石地帯と非黒曜石地帯という在地の石材差も関連していると思われる。

しかし、本稿では細石刃文化の出現に問題の焦点を絞ることから、細石刃文化の細かな地域性についてはふれず、細石刃文化に先行する内容が比較的明瞭な南関東地方（とくに神奈川県相模野台地）を中心に検討する。

相模野台地では、細石刃石器群が立川ローム層L1H上部からL1S上部にかけてみられ、細石刃核の技術的型式とその出土層準から、前後2段階に大別されている。問題となる前半期

の例としては、柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅳ文化層、代官山遺跡第Ⅲ文化層、上草柳第3地点遺跡第Ⅰ文化層、月見野遺跡群上野遺跡第1地点第Ⅲ文化層などがある。柏ヶ谷長ヲサ遺跡、上草柳第3地点遺跡、上野遺跡第1地点では、黒曜石を用いた小型の野岳一休場型細石刃核に小型不定型の剥片を素材とする削器、錐、加工痕のある剥片が伴う。一方、代官山遺跡では、細石刃核の形状と石器組成がほかの遺跡とは異なる。細石刃核は黒曜石製であるが、小型の舟底形である。打面は礫面、あるいは1枚の大きな剝離面で、連続的な側面調整によって外形が整えられている。これを野岳一休場型の範疇に含めるか否かは、議論のわかれるところである。共伴する石器は、不定型の剥片を素材とした削器類や小型木葉形の槍先形尖頭器がある。

このように、相模野台地においても細石刃文化出現時の姿は、まだはっきりとしていない。最大公約数的にみると、黒曜石を用いた小型の細石刃、不定型な剥片を素材とする削器、加工痕のある剥片によって構成される石器群ということになるだろうか。

細石刃文化に先行する石器文化は、立川ローム層B1上部で形成された槍先形尖頭器文化が該当する。具体例として、下鶴間長堀遺跡第Ⅱ文化層（B1上面）、月見野遺跡群上野遺跡第1地点第Ⅳ文化層（L1H下部）、同第3地点第Ⅱ文化層（L1H中部）、中村遺跡第Ⅳ文化層（B1上部～L1H下部）、同第Ⅲ文化層（L1H下部）、深見諏訪山遺跡第Ⅲ文化層（B1上部）、寺尾遺跡第Ⅱ文化層（L1H）、月見野ⅣA遺跡上層（L1H）、上和田城山遺跡第Ⅱ文化層（B0）などである。これらは、次の二つのグループに分けられる。

A群；上野遺跡第1地点第Ⅳ文化層を典型例とする。槍先形尖頭器はやや細身の木葉形であり、中型（5～10cm）両面調整で地元産の石材（主に玄武岩）を多用するものと、小型（5cm未満）片面・周辺調整で、良質の黒曜石を用いるものに大別される。そのほかの石器は、小型幾何形のナイフ形石器、削器、加工痕のある剥片、使用痕のある剥片などが少量ある。グループ内の変化を層位的に追うと、下鶴間長堀遺跡第Ⅱ文化層→上野遺跡第1地点第Ⅳ文化層→中村遺跡第Ⅲ文化層→月見野ⅣA遺跡上層となり、細身への変化、小型品の大型化、両面調整の増加、黒曜石の減少といった傾向がみられる。

B群；中村遺跡第Ⅳ文化層を典型例とする。石器群は、小型で幅広の木葉形である槍先形尖頭器と、二側縁調整や小型幾何形のナイフ形石器を主体とする。槍先形尖頭器は片面調整や半両面調整（横断面がカマボコ形）が主流を占める。石材の大半は不純物の多い黒曜石である。二側縁調整のナイフ形石器のなかには大きさや平面形態の点で槍先形尖頭器に近いものが含まれる。グループ内の変化は、深見諏訪山遺跡第Ⅲ文化層→上和田城山遺跡第Ⅱ文化層となり、ナイフ形石器と縦長剥片の減少から消滅への過程が考えられる。

A群は、その最も古い下鶴間長堀遺跡第Ⅱ文化層を除くと、槍先形尖頭器の素材に扁平な礫や不定型な剥片を用いている。槍先形尖頭器を多量に、かつ機能的に分化された複数の形態を製作する要請のなかで、ナイフ形石器文化期以来の、画一化された素材を多量に生産する石刃

技法は衰退し、多様な素材供給に対応できる形に変化したと思われる。共伴するナイフ形石器や削器も不定型な剥片を素材としており、定型的な縦長剥片（石刃）は用いられていない。わずかに伴う縦長剥片は、打面と作業面を頻繁に転移し、長幅比が2：1から1：1程度の幅広のものや、厚手の剥片を石核素材とし、石核調整を行わずに剥離されたものである。B群は槍先形尖頭器やナイフ形石器の素材として中型の縦長剥片を用いている。しかし、その製作技術は、打面と作業面を頻繁に入れ替えながら剥片を剥離しており、石核調整がとぼしい。その結果、打面が大きく、全体に幅広で両側縁が平行しない剥片が生産される。縦長の剥片ではあっても、石刃とはほど遠い内容である。また、大小のバラツキがあり、規格性が低い。さらに、ナイフ形石器の最終段階のものとはいえ、小型の縦長剥片を生産しているわけではない。

したがって、A・B両群とも、細石刃生産にそのまま移行する要素をもった縦長剥片剥離技術は認められない。細石刃文化期直前におけるこうした石器群の内容は、相模野台地にかぎられた現象ではなく、関東・中部地方に広く一般化することが可能であろう。

西北九州については、萩原博文・木崎康弘氏によるナイフ形石器文化の編年研究を参考とした（萩原 1985、木崎 1988）。萩原氏の編年によると、細石刃文化に先行する石器群として、ナイフ形石器文化後・晩期が該当する。資料として、後期では長崎県中山遺跡、同堤西牟田遺跡第Ⅲ文化層、同大戸遺跡第1文化層がある。各石器群は、縦長剥片を素材とするナイフ形石器や百花台型台形石器を指標とし、これに削器などが伴う。縦長剥片は、平坦打面で、石核調整のとぼしい幅広なものが多い。晩期は堤西牟田遺跡第Ⅳ文化層があげられるが、縦長剥片を素材とするナイフ形石器、削器、使用痕のある剥片などが組成する。台形石器はみられない。縦長剥片は旧作業面を打面としながら打面転移を頻繁に行うもの（堤西牟田技法）や礫道技法類似の剥離技術がみられる。いずれも、中型幅広の縦長剥片を生産する。

西北九州では、細石刃文化直前においても縦長剥片剥離技術が安定しているが、これがはたして細石刃剥離技術にそのまま移行し得るかの否か、判然としない。縦長剥片の大きさは、AT降灰から細石刃文化直前にいたるまで、とくに明瞭な変化がみられない。また、規格性についても、石核調整が少なく、打面と作業面の転移が頻繁なことから定型化したものとはいえない。細石刃文化直前の縦長剥片と細石刃とのギャップは大きい。

瀬戸内地方から近畿地方にかけては、堆積条件に恵まれないため、石器群の先後関係がとらえにくい。しかし、細石刃文化直前の内容は、かつて井島Ⅰ型ナイフ形石器とよばれた、不定型な横長剥片や縦長剥片を素材とする、小型幾何形のナイフ形石器が位置付けられる見解は妥当であろう。その根拠として、大阪府大園遺跡、同八尾南遺跡第2地点などで槍先形尖頭器を伴わない小型のナイフ形石器群が検出されていること、岡山県宮田山遺跡、同鷲羽山遺跡では中・小型の槍先形尖頭器が検出されているが、瀬戸内地方全体でみると少数例にすぎず、関東・中部地方のように槍先形尖頭器を主体とする石器群はみられないことによる。したがって、

本地方を関東・中部地方と共通の石器文化圏として理解することはできない。瀬戸内地方は、角錐状石器の消滅から細石刃文化期にいたるまで、九州地方や関東・中部地方とは異なる独自の地域性を展開していたと考えたい。

以上、西南日本では、細石刃生産に移行し得る定型的な小型の縦長剥片剥離技術はみられなかった。また、関東地方と西北九州地方において対照的であるが、細石刃文化直前の西南日本の様相は、関東・中部地方の槍先形尖頭器群、瀬戸内地方の小型ナイフ形石器群、西北九州の中型縦長剥片を素材とするナイフ形石器群となっており、それぞれ地域性が強く、けっして一つの文化圏とはいえない。したがって、西南日本各地は相互に独立的で、同時に、いずれの地域においても細石刃生産技術が独自に発生する素地はないと考えられる。

3. 東北日本型細石刃文化の南下と展開

本節では、本州地方における東北日本型細石刃文化と西南日本型細石刃文化との時間的な先後関係を検討し、両者が互いに関連をもつか否か考えてみたい。

まず第一に本州地方における東北日本型細石刃文化の石器群の代表例として、山形県角二山遺跡、茨城県後野遺跡B地点、神奈川県長堀北遺跡の3遺跡を取り上げてみる。石器群の構成は、いずれも湧別技法による細石刃核が含まれる点で共通するが、それ以外の共伴石器に差異がある。角二山遺跡では、荒屋型彫器、角二山型を含む搔器、削器、錐などが伴う。各石器の素材は不定型の剥片が主流であり、細石刃核の調整剥片が多用されているが、石刃技法が若干みられる(桜井 1992)。類例として新潟県月岡遺跡がある。後野遺跡B地点も角二山遺跡に類似した構成であるが、ここでは石刃技法がみられない。ただし、石器素材のすべてが細石刃核の調整剥片でまかなわれているのか、あるいは不定型の剥片を生産する独自の技法(例えば交互剥離の石核)が伴うのかは不明である。類例として千葉県木戸場遺跡がある。長堀北遺跡では、本来北方系の細石刃文化の指標ともいえる荒屋型彫器が伴わず、多量の槍先形尖頭器、削器、楔形石器により構成される。類似した内容をもつ神奈川県勝坂遺跡では、槍先形尖頭器のほかには有茎尖頭器や文様不明の土器が伴う。以上から、東北日本型はすべてが均質ではなく、少なくとも様相の異なる3種類の石器群が存在することになる。

各石器群は、湧別技法という共通の細石刃生産技術をもつことから、互いに系統関係があると考えられる。それでは、石器構成の差異は、どのような要因で生じたのであろうか。

まず、角二山遺跡と後野遺跡B地点の差異は石刃技法の有無に限られており、そのほかの構成は基本的に一致している。東北地方と関東地方という、旧石器時代全体をとおして様相の異なる石器文化が展開したなかにあっては、異例の類似である。ひるがえって、角二山遺跡の源と考えられる北海道地方東北部の細石刃文化をみると、細石刃は大半が黒曜石製であるのに対

し、荒屋型彫器は頁岩、メノウであり、彫器の素材に細石刃核の調整剥片を用いてはいないことがわかる。搔器や削器については、黒曜石を用いた真正の石刃を素材とする例が多い。したがって、角二山遺跡と北海道地方の諸遺跡とは互いに系統関係をもつと考えられるが、石器群の製作技術の構造が異なっている。こうした事情をも考慮すると、角二山遺跡と後野遺跡B地点の差異は、時間的な違いよりも、むしろ細石刃文化が南下する過程で生じた地域差が主要因ではないかと考えられる。次に、後野遺跡B地点と長堀北遺跡をみると、同じ関東地方であるにもかかわらず、湧別技法をもつこと以外に石器構成がまったく異なっており、時間差、段階差を考えないわけにはいかない。そこで、角二山遺跡を東北日本型I(a)群、後野遺跡B地点を同I(b)群、長堀北遺跡を同II群とする。

神奈川県相模野台地では、先述したとおり、西南日本型細石刃文化の石器群が立川ローム層L1H上部からL1S下部にかけてみられ、東北日本型細石刃文化II群は、長堀北遺跡、勝坂遺跡、月見野遺跡群上野遺跡第1地点、寺尾遺跡などで得られているように、L1S中部から上部にかけて検出されている。したがって、東北日本型II群が西南日本型よりも新しいことは明瞭である。

そこで、東北日本型I群と西南日本型との時間的先後関係が問題になるが、両者が同一遺跡で層位的先後関係をもって検出された例はない。数少ない手掛かりの一つは、角二山遺跡や岡山県恩原遺跡で東北日本型I群を主体とする石器群の中に、西南日本型の細石刃核(野岳-休場型)の存在を示す形跡(細石刃核本体や打面再生剥片など)がわずかにみられることである。共伴か時間差か厳密には判断しにくい、少なくとも両者の一部が時間的に平行していた可能性がある。また、千葉県下総台地では、同一地域内において東北日本型と西南日本型の両者がモザイク状に分布する。西南日本型を出土する遺跡として、木苧峠遺跡、向原遺跡、星谷津遺跡、大林遺跡、船尾白幡遺跡があり、東北日本型を出土する遺跡として木戸場遺跡、大網山田台遺跡、高岡大山遺跡などがある。一遺跡における層位的関係がないため、時間的先後関係をもつか、同時並存か不明瞭であるが、本地域の西南日本型は、宇田川氏による研究成果のとおり、その前半は相模野台地と共通していたことが想定される(宇田川 1993)。問題は、東北日本型がいつ到来したかである。西南日本型以前に出現し、西南日本型の成立に関与したのか、あるいは西南日本型よりも新しく出現し、両者は系統的には無関係なのか。興味深いのは、相模野台地では、細石刃文化期の後半に、西南日本型では船野型細石刃核が、終末期に東北日本型II群がみられる反面、東北日本型I群の検出例がなく、下総台地では、東北日本型I群がみられるものの船野型細石刃核や東北日本型II群の検出例がないことである。細石刃文化期前半は共通し、後半に大きな違いがあるように思われる。また、東北日本型のI群とII群とは、たとえ石器構成が異なってはいても細石刃生産技術が共通しており、両者を時間的に大きく切り離して考えることはできない。むしろ、時間的・地域的変化のなかで、漸移的に変化したもの

とみる方が自然ではないかと考えられる。

中部地方南部（中部高地）は、長野県矢出川遺跡に代表されるように、西南日本型が主体的に分布する地域であるが、同柳又遺跡C地点では、上層から東北日本型が、下層から西南日本型が検出されている（谷口 1991）。東北日本型は、荒屋型彫器、槍先形尖頭器のいずれの共伴関係も判然としないためI群かII群か不明であるが、細石刃に安山岩を用いていることから、II群かも知れない。その一方で、長野県中ツ原第5遺跡B地点では荒屋型彫器を伴う東北日本型I群が検出されている。本地域に船野型細石刃核の検出例が少ないことを考え合わせると、先述したように、細石刃文化期前半は西南日本型が展開し、後半になって東北日本型が流入したと考えられる。隣接する東海地方では、船野型細石刃核が数多くみられ、東北日本型の検出例がとばしいことも、細石刃文化期後半の事情を物語っているように思える。

以上、東北日本型と西南日本型との関係を関東・中部地方という後者主体の地域で考えると、細石刃文化期前半は西南日本型が分布し、後半になると一部の地域に東北日本型が流入し、両者が並存する。そして終末期にいたり、東北日本型が存続するという流れが想定できる。したがって、東北日本型の影響を受けて西南日本型が形成されたという仮説は、時間的關係から困難ではないかと考えられる。むしろ、両者は別々に日本列島に流入し、中央部の関東地方で出会ったとみたい。

4. 中国における細石刃文化の諸相

中国では、1900年代以降、長城以北の乾燥地帯（現在の内蒙古自治区、黒竜江省、吉林省など）を中心に、細石刃文化に関連する資料が検出されてきた。しかし、当該地域に分布する多くの遺跡は堆積条件に恵まれない砂丘や草原に立地するため、表面採集資料が中心であったこと、隣接する複数遺跡の資料を一括して扱ったことなどの問題点があり、細石刃文化の詳細は、長い間不明瞭であった。また、当時は外国人研究者による調査が主流であったことも、研究が継続的な進展をみせなかった要因ではないかと思われる。

解放後は、中国人研究者自身による細石刃文化研究が開始された。1950年代には、裴文中、安史敏氏らによって、細石刃核の形状と共伴する石器群の内容、遺跡の立地などを総合的に評価し、細石刃文化の類型化とその編年作業が進められた。次いで、1970年代から1980年代にかけて、山西省下川遺跡、河北省虎頭梁遺跡といった、中国北半部における重要遺跡の調査と研究報告が相次いでなされ、そうした資料に基づいて、買蓋坡、蓋培、陳淳氏らによる細石刃生産技術の研究が次々に提示されていった。一方、山東省、江蘇省を中心とする中国南半部においても当該資料が着実に増加し、現在では、中国全域を対象とした細石刃文化研究の素地ができあがった。そこで、中国の細石刃文化を分析し、日本との異同を検討したい。

はじめに、中国で検出されている細石刃核の型式分類を行いたいと思う。

I群は、両面・半両面・周辺調整によって石核用素材を用意した後、細石刃生産にかかる打面をつくるもので、日本では楔形細石刃核とよばれている。4種類に細分した。

a類；片面・半両面調整の石核用素材に対し、ナイフ形石器の加工に似た急角度の調整によって打面のあらましをつくり、作業面側から短い削片を剥離して有効加撃面を設定する。中国では陽原技術（陽原石核）、楔状石核とよばれている。主な出土遺跡は、河北省虎頭梁遺跡、山西省薛関遺跡がある。日本の峠下型に対応すると考えられる。

b類；両面調整で楕円形をした石核用素材を縦割りにして打面をつくり、その一端から細石刃を剥離するものである。石核用素材を縦割りにする過程で、断面三角形と断面台形（スキー状）の削片が数枚剥離される。中国では石核刮器、楔状石核河套技術、船底形石核、寛形楔状石核など、さまざまな呼称がある。おもな出土遺跡は、内モンゴル自治区海拉爾松山遺跡、同嘎查遺跡、黒竜江省顧郷屯遺跡、陝西省沙苑遺跡、虎頭梁遺跡、山西省下川遺跡があり、中国北半部における最もポピュラーな細石刃核である。日本の湧別技法札滑型に対応すると思われる。

c類；両面調整の石核用素材を横割りにした形態で、打面の調整は、作業面側から背縁に向かう粗い剥離によるもの、求心的で細かな剥離によるものがある。中国では楔形石核、窄型楔形石核とよばれており、海拉爾松山遺跡で数多く出土している。日本の蘭越型に対応する。

d類；両面・半両面調整の石核用素材を用い、ナイフ形石器に似た調整で打面をつくる。作業面に接して細部調整が施され、有効加撃面とする。中国では、楔状石核虎頭梁技術、船底形石核、寛形楔形石核などよばれている。主な出土遺跡は、内モンゴル自治区扎賚諾爾遺跡、海拉爾松山遺跡、嘎查遺跡、虎頭梁遺跡がある。日本の福井型に類似する。

II群は厚手の削片や分割した礫を素材に用い、その平坦面を利用して側面調整を行う細石刃核である。外形は舟底形である。

a類；側面調整が打面と下端の両側からなされ、横断面がV字形となる舟底形の細石刃核である。中国では、船底形石核、船形石核とよばれている。おもな出土遺跡は、虎頭梁遺跡、下川遺跡などがあり、中国北半部で見られる。日本の幌加型に対応すると思われる。

b類；打面からの側面調整を主体とし、横断面がU字形となる。中国では、a類と同様の呼称がなされている。おもな出土遺跡は、山東省鳳凰嶺遺跡、同黒竜潭遺跡、江蘇省大賢庄遺跡、広東省西樵山遺跡がある。日本の船野型に対応すると思われる。

c類；打面からの側面調整を主体とする小型の舟底形である。a・b類と異なり、打面が複剥離面で構成されている。中国では、寛型楔状石核、楔状石核とよばれている。おもな出土遺跡は、江蘇省爪墩遺跡、同南山遺跡がある。日本では、型式名がつけられていないが、鹿児島県加治屋園遺跡、同加栗山遺跡などに類例がある。

III群は、小礫、削片などを素材とし、大略、稜柱形の細石刃核である。残核の形態はバリエ

イジョンに富むが、とくに細分はしなかった。中国では、柱状石核、扁錐状石核、円柱形石核、円錐形石核、鉛筆頭状石核など、さまざまなよび方がある。おもな出土遺跡は、河南省靈井遺跡、黒竜潭遺跡、大賢庄遺跡、西樵山遺跡がある。日本の野岳一休場型に類似する。

Ⅳ群は、細石刃剥離面（作業面）が石核の全周をめぐり、円錐形、円柱形を呈する。打面は平坦な一枚の剥離面によるもの、求心的な細かい剥離によるものなどがある。中国では、Ⅲ群と同様の呼称がなされており、区別されていない。内蒙古自治区富河門溝遺跡、同轉竜藏遺跡、吉林省双塔屯遺跡など、中国北半部の新石器時代遺跡から、土器、石刃鎌とともに出土している。日本では、新石器時代相当期（縄文時代）に属する細石刃核の存在は不明瞭であるが、北海道の紅葉山遺跡でみられる円錐形の細石刃核が関連するかも知れない。

以上、4群9類の細石刃核は、単独で、あるいはいくつかを組み合わせて検出される。しかし、各遺跡における遺物の平面・垂直分布が資料化されていないため、複数型式の細石刃核が共伴関係か、時期差か不明瞭である。ここでは、細石刃核相互の細かな編年は検討できない。

次に、細石刃文化に含まれる可能性のある遺物の分類案を記す。

剥片石器は、ナイフ形石器 (Kn)、角錐状石器 (Ka)、槍先形尖頭器 (Po)、搔器 (Es)、削器 (Ss)、彫器 (Gr)、錐 (Dr)、楔形石器 (Pi)、その他に分類した。さらに搔器と削器は次のように細分した。

搔器 a 類は、石刃や縦長剥片を素材とし、その端部に刃部をつけたものである。長幅比は 2 : 1 よりも大きい。b 類は、各種剥片を素材とし、長幅比が 1 : 1 程度のものである。素材の一端に刃部をもつものと、ほぼ全周にわたって刃部をもつものがある。

削器 a 類は、1 側縁に刃部をもつものである。b 類は、両側縁に刃部をもち、先端を尖らせたものである。c 類は、桶状剥離に似た細長い剥離によって刃部をつくったものである。

礫石器は、石斧 (Ax)、礫器 (Pb)、その他に分類した。

素材の製作技法は、①石刃、②不整形の縦長剥片、③横長剥片を含む不定型剥片をそれぞれ剥離する 3 種類に分類した。

新石器時代の遺物としては、磨製石器類、石鎌、石刃鎌、土器を取り上げた。

第 1 図は、中国における細石刃文化のおもな遺跡をプロットしたものである。これと第 1 表を合わせてみると、細石刃核 I 群と II 群 a 類は、概ね北緯 35 度以北に分布し、II 群 b・c 類と III 群は北緯 40 度以南を中心に分布することがわかる。そこで、それぞれを北群、南群とする。

第 1 表は、主要遺跡における、遺物の組み合わせを示したものである。数量については、●；11 点以上、◎；10～6 点、○；5～1 点、□；点数不明ながらも存在する、を示している。

さて、剥片石器、礫石器、技法の各項目をみると、北部を中心とするもの、南部を中心とするもの、両地域にみられるものがある。北部を中心とするものは、剥片石器では搔器 a 類、礫石器では石斧、技法では石刃技法がある。一方、南部を中心とするものは、剥片石器では削器

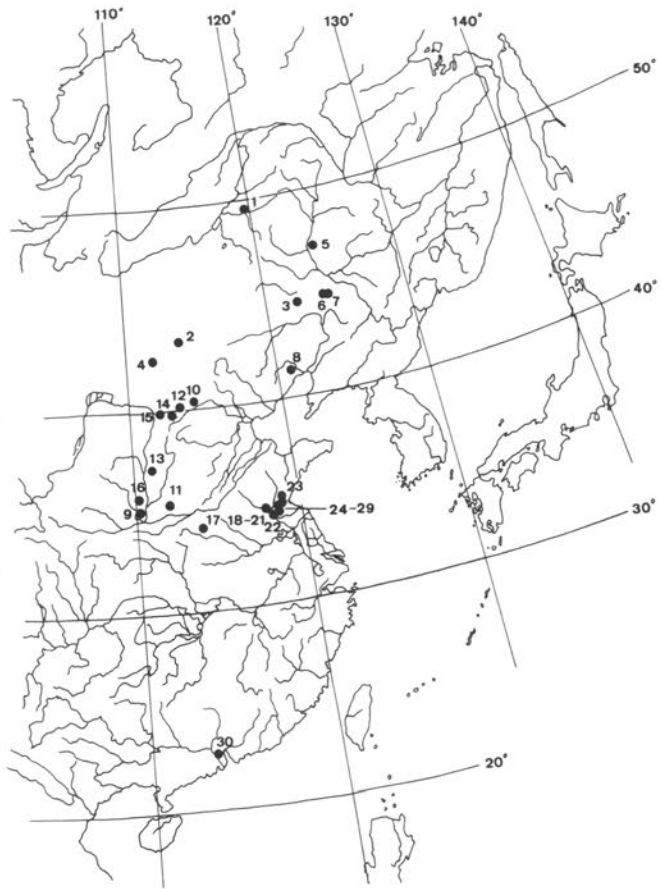
c類がある。それ以外の各石器類や技法については、明瞭な地域性がみられない。石器の組み合わせと細石刃核の内容を総合すると、中国北半部では、細石刃核Ⅰ群とⅡ群a類にナイフ形石器、槍先形尖頭器、各種の搔器・削器類、彫器、錐、石斧が伴い、素材は石刃技法を中心に、多様な剝離技術をもつ石器群となる。とくに、石刃素材の搔器a類が特徴的である。南部では、細石刃核Ⅱ群b・c類とⅢ群にナイフ形石器、搔器・削器類、彫器が伴い、各石器の素材には形状の不安定な縦長剝片や不定型剝片を生産する石器群がみられる。

石器群の組み合わせについて概観したが、先述したとおり、

いずれの資料も共伴関係が否か、不明瞭である。また、ナイフ形石器や角錐状石器のなかには、細石刃文化期以前のもが含まれている可能性もある。そうした問題を含みながらも、中国における細石刃核の型式や石器組成のあり方が、日本で認められた細石刃文化の2者の類似することは重要であろう。

そこで、西南日本型細石刃文化と関連をもつ可能性のある、中国南半部の細石刃文化を、さらに検討したいと思う、以下、主要遺跡を検討する。

(a) 靈井遺跡は、河南省許昌に所在する。地表下10mほどの砂層より資料が検出されたが、包含層が水成層のため原位置を離れていると判断された。ただし、新石器時代の遺物（土器や磨製石器）は、上位の地層に限って認められる。獣骨は、ほ乳類12類のうち絶滅種2種（16.7%）で、山頂洞遺跡に近い。細石刃核はⅢ群が数例検出されている。共伴石器としては、不定型剝片を素材とする小型の搔器b類と削器a類を中心に、若干の彫器、礫器がある。石核には、長幅比が1：1に近い縦長剝片を剝離したサイコロ状のものがあり、搔器、削器の素材生産にかかわると思われる。石材は、石英を主体に、燧石が加わる。



第1図 中国の細石刃文化遺跡分布図

第1表 中国の細石刃文化遺跡組成表

遺跡名	行政区	細石刃核								剥片石器											礫石器			技法					新石器遺物						
		I群				II群				III群	IV群	不	Kn	Ka	Po	Es		Ss			Gr	Dr	Pi	他	Ax	Pb	他	石刃	竪長	不定型	磨製品	石鏡	石刀	土器	
		a	b	c	d	不	a	b	c	群	群					a	b	a	b	c															
1 海拉爾松山	内蒙古	○	◎	○	○				○						○	○	◎	●	○		○	○	○	○	○	○	□	□	□	○					
2 吉日嘎郎図	〃				○				◎					○	○							○					□	□	□	●		□			
3 嘎查	〃	○		○					○				◎		○	○				○	○	○	○	○	○	□	□								
4 発泉	〃								○	○					○	○									○		□	□							
5 昂昂溪	黒竜江								○							◎				○	○					□	□	□	□	□	□	□	□		
6 双塔屯	吉林								○					○						○						□	□	□	○	○	□	□	□		
7 大布蘇	〃								○					○		◎	○	○			○	○				□	□	□	□	□	□	□	□		
8 東山嘴	遼寧								○															○			□	□	□	○	□	□	□		
9 沙苑	陝西	○	○			○				●	○	○	○	◎	○	◎	●	○					◎	◎		□	□	□				○			
10 虎頭梁	河北	○	○		○					○				●	○	○	○	○	○	○	○	○	○			□	□	□							
11 下川	山西			○		○				●	●	●	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎				○		□	□								
12 椋子町	〃			○					○					○	○																	○			
13 薛関	〃	○	○						○				○	○											○		□	□							
14 懷仁窯子頭	〃								○						○	○				○	○	○	○		○	○	□	□							
15 高山鎮	〃								○				○	○							○					□	□								
16 固隆	〃								◎				◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎			□	□								
17 靈井	河南								◎						◎	◎							○				□	□							
18 馬陵山	04 山東							○	○	○	○			○		●	○										□	□							
19 〃	08 〃							◎	○	○	○				◎	●	○						○				□	□							
20 〃	09 〃							●	○	○	○				●	●	○										□	□							
21 〃	26 〃							◎	○	○	○				●	●							◎				□	□							
22 黒竜潭	〃							○	○				○	○		●	○						○			□	□								
23 鳳凰嶺	〃							○	◎			○	○		◎	◎							○			□	□	◎						□	
24 瓜墩	江蘇	○						◎	○	○				●	●	●	○	●	○	○	○	○	○	○		□	□								
25 大賢庄	〃							◎	○	○			○	◎	◎	◎							○			□	□								
26 何庄	〃											○	○	○		○	○						○			□	□								
27 南山	〃							○	○							○	○						○			□	□								
28 石碑	〃							○	○						○	○										□	□								
29 范頂骨	〃							○							○	○										□	□								
30 西樵山	広東							○	○	◎			○	○		○	○	○	○	○	○	○	○			□	□								

(b) 黒竜潭遺跡は、山東省郟城に所在し、沐河左岸の低丘陵上に位置する。表土直下に包含層があることから、遺物の多くは地表面に散在する。細石刃核はII群b類、III群があり、後者が多い。そのほかの石器は、多量の削器a類と少量の搔器b類、角錐状石器、小型木葉形の槍先形尖頭器がある。石材は、石英、水晶、メノウ、燧石などがある。表面採集資料が主体のため一括性に問題があるが、新石器時代遺物がないことから、資料全体が細石刃文化の様相をある程度示していると考えたい。このほか、馬陵山西側には約40か所の遺跡がある。

(c) 大賢庄遺跡は、江蘇省東海県の西北に所在し、馬陵山の山頂付近(標高90m)に立地する。堆積条件が悪く、遺物の大半が地表面に散在する。細石刃核はII群b類、III群があり、そのほかは、搔器b類、削器a類、小型の槍先形尖頭器を主体に、角錐状石器、彫器などがみられる。各石器の素材は、不定型剥片と思われる。石材は、石英、メノウ、燧石などで、細石刃核II群とIII群の間での使いわけは認められない。新石器時代遺物は検出されていない。

(d) 鳳凰嶺遺跡は、山東省臨沂県相公公社に所在し、沂河右岸の丘陵上に位置する。漢代墳墓の墳丘より多量の細石刃文化期の遺物が検出された。細石刃核はII群b類とIII群があり、

これに搔器 b 類、削器 a 類、ナイフ形石器、小型木葉形の槍先形尖頭器、彫器などがみられる。剥片剥離技術は、不整形の縦長剥片と不定型の剥片を生産するものがある。

(e) 西樵山遺跡は、広東省南海県に所在し、火山性丘陵上に立地する（標高20mの地点と標高60m～80mの地点）。表面採集の資料が多い。細石刃核はⅡ群 b・c 類とⅢ群があり、前者の関連資料として作業面再生剥片、後者について円盤状の打面再生剥片がみられる。細石刃以外の石器は、削器 a・b 類を中心に、ナイフ形石器、槍先形尖頭器、搔器 b 類、彫器、錐がある。石材はメノウ、燧石が中心である。野岳－休場型・船野型の南限として重要である。

以上、中国南半部の細石刃文化資料は、一括性についての問題があるが、あえて石器組成を考えると、先述したとおり、細石刃核Ⅱ群 b・c 類、Ⅲ群、搔器 b 類、削器 a 類を中心に、ナイフ形石器、角錐状石器、小型木葉形の槍先形尖頭器、彫器、錐が少量加わる構成である可能性が高い。細石刃核については、Ⅲ群単独（霊井遺跡）とⅡ・Ⅲ群共存（黒竜潭遺跡、大賢庄遺跡）の2様のあり方がみられた。日本の例を考慮すると、両者には時間差、あるいは地域差があるのかも知れないが、山東省、江蘇省を中心にして1遺跡で両細石刃核のみられる例の多いことから、共伴する可能性が高いと思われる。石材は、各遺跡とも石英、メノウ、燧石が中心で、細石刃核の型式との相関性は、現状ではみられない。各石器の素材としては、石刃がなく、不整形の縦長剥片や不定型剥片が用いられている。立地のデータも少ないが、丘陵性の地形が目立つ。

こうした、中国南部における細石刃文化と日本列島の西南日本型細石刃文化を比べると、細石刃核の型式、共伴石器の組成とその素材生産の点で共通する。中国全体についても、日本列島における南北2相の細石刃文化と同様の視点でみることができる。したがって、中国南半部の細石刃文化と西南日本型細石刃文化とは、同一のものと考えられる。

5. 結 語

本稿では、西南日本型細石刃文化の起源を、三つの方向から考えてみた。

第1は、西南日本型細石刃文化の主要な分布域において、細石刃文化直前の石器文化のなかに細石刃生産につながる技術的要素が存在するか否かを検討した。その結果、細石刃文化直前の様相は、関東地方では槍先形尖頭器文化が相当し、当該石器文化に細石刃生産につながる技術的要素は認められなかった。また、九州地方ではナイフ形石器文化の終末期にあたり、縦長剥片剥離技術を保有するものの、ナイフ形石器、縦長剥片の大きさは小型ではなく、石核調整もとぼしいことから、細石刃生産に結びつかないと判断した。近畿・瀬戸内地方でもナイフ形石器文化の終末期にあたり、ナイフ形石器の素材に小型で不定型の横長剥片や縦長剥片を用いている。しかし、石核調整を伴う定型的な縦長剥片はみられない。したがって、西南日本各地

域では、細石刃生産に直接関連するような在来技術を先行する石器文化のなかにみいだすことはできなかった。

第2は、東北日本型細石刃文化の、関東・中部地方への到来時期を検討した。まず、東北日本型は前後2段階が想定され、南関東地方における、荒屋型彫器を含まない後半の石器群（東北日本型II群）については、西南日本型の方が古いことが層位的に明らかである。前半については、細石刃製作技術の面で後半と連続する可能性が高いこと、西南日本型の後半に多くみられる船野型細石刃核と東北日本型古段階の分布が微妙にズレることから、東北日本型の関東・中部地方への到来は細石刃文化期の後半と考えられる。したがって、東北日本型の流入に刺激され、在来の技術を応用する形で関東地方以西で細石刃生産が開始されたとするみかたは、時間的前後関係に問題があると考えられる。

第3は、中国に西南日本型細石刃文化の類例がみられるか、細石刃核の型式と石器組成の面から検討した。その結果、中国では北緯35～40度を境に、北に東北日本型の類例が、南に西南日本型の類例が展開することがわかった。

以上のことから、西南日本型細石刃文化は日本列島内で独自に発生したものではなく、中国南半部、とくに山東半島周辺より九州地方へ渡来し、さらに東進したものと考えられる。

今後の課題は、①西南日本各地の石器文化が、それぞれ異なる内容をみせていたにもかかわらず、細石刃文化の到来後、すみやかに外来の細石刃文化を受け入れ、齊一的になった理由をさぐること、②中国において二つの細石刃文化が成立した過程をたどり、歴史的に評価することである。改めて、日本列島における旧石器文化終末期から縄文文化成立期の動向を、列島内の個々の動きと東アジアの全体の流れの両面から考察したいと思う。

(1993. 8. 1脱稿)

参考文献

- 安蒜政雄 1984 「日本の細石器文化」『駿台史学』第60号
- 麻生 優 1965 「細石器文化」『日本の考古学』第1巻
- 稲田孝司 1986 「縄文文化の形成」『日本考古学』6
- 上野秀一・加藤稔 1973 「東北地方の細石刃技術と北海道との関連について」『北海道考古学』第9輯
- 宇田川浩 1992 「千葉県細石刃文化期細分試案」『千葉県の歴史』第44号
- 小野 昭 1979 「瀬戸内沿岸地方の細石器文化」『駿台史学』第47号
- 小野 昭 1972 「内モンゴリアの細石器について（上）」『考古学研究』第19巻第2号
- 小畑弘己 1989 「中国大陸から日本列島へ」『季刊考古学』第29号
- 織笠 昭 1983 「細石刃の形態学的一考察」『人間・遺跡・遺物—わが考古学論集1』
- 加藤晋平 1976 「北アジアの旧石器文化におけるクサビ形石核について」『歴史・人類』2号

島立 桂

- 加藤晋平 1979 「黄河の水は江戸に通じるか」『三上次男博士頌寿記念論集』
- 加藤晋平 1984 「日本細石器文化の出現」『駿台史学』第60号
- 加藤晋平 1988 『日本人はどこから来たか—東アジアの旧石器文化』
- 鎌木義昌 1959 「細石器問題の進展 その3」『貝塚』第88号
- 木崎康弘 1988 「九州ナイフ形石器文化の研究—その編年と展開—」『旧石器考古学』37
- 小林達雄 1970 「日本列島に於ける細石刃インダストリー」『物質文化』第16号
- 小林達雄 1986 「日本列島旧石器時代文化の3時期について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第11集
- 佐川正敏 1985 a 「中国の細石刃研究の現状と課題」『考古学ジャーナル』243号
- 佐川正敏 1985 b 「中国北方における旧石器時代晩期の石器群の変遷に関する予察」『考古学論叢』
- 桜井美枝 1992 「細石刃石器群の技術構造—山形県角二山遺跡の分析—」『東北文化論のための先史学歴史学論集』
- 下川達弥・萩原博文 1983 「西北九州における旧石器時代石器群の編年（上）（下）」『古代文化』第36巻6・9号
- 鈴木次郎 1983 「細石器 本州地方」『季刊考古学』第4号
- 鈴木忠司 1971 「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化について」『古代文化』第23巻第8号
- 芹沢長介 1958 「細石器問題の発展 その2」『貝塚』第82号
- 芹沢長介 1960 a 『石器時代の日本』
- 芹沢長介 1960 b 「細石器問題の進展 その4」『貝塚』第96号
- 芹沢長介 1961 「日本における細石刃文化」『歴史教育』第9巻第3号
- 芹沢長介 1963 「無土器文化の地方色」『国文学解釈と鑑賞』第28巻第5号
- 芹沢長介・柳沢和明 1982 「矢出川遺跡」『長野県史』考古資料編全1巻(2)
- 谷口康浩 1991 「木曾開田高原柳又遺跡における細石刃文化」『國學院雑誌』第92巻第2号
- 橘 昌信 1973 「九州における細石器文化—細石核の分類と編年試論—」『考古学論叢』第1号
- 堤 隆 1987 「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究』13
- 堤 隆 1991 「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究』17
- 鶴丸俊明 1979 「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』第47号
- 戸沢充則 1964 「矢出川遺跡」『考古学集刊』第2巻第3号
- 戸沢充則 1979 「日本における細石器の研究」『駿台史学』第47号
- 西村寿文 1983 「中部瀬戸内地域における細石刃生産技術の検討」『旧石器考古学』26
- 萩原博文 1985 『堤西牟田遺跡』
- 橋本勝雄 1983 「長崎県福井洞穴の細石刃生産技術について—第2・3層を中心として—」『考古学論叢』
- 林 謙作 1970 「福井洞穴における細石刃技術とその東北アジア・北アメリカにおける位置付け

- (上) (下) 『考古学研究』第16巻第4号、第17巻第2号
- 吉崎昌一 1961 「白滝遺跡と北海道の無土器文化」『民族学研究』第26巻第1号
- 安 志敏 1957 「細石器文化」『考古通迅』1957年第2期
- 安 志敏 1978 「海拉爾の中石器遺存—兼論細石器の起源和伝統—」『考古学報』1978年第3期
- 安志敏他 1957 「陝西朝邑大蘇沙苑地区の石器時代遺存」『考古学報』1957年第3期
- 黄慰文他 1979 「広東南海県西樵山遺址の複査」『考古』1979年第4期
- 王向前他 1983 「山西蒲県薛関細石器」『人類学学報』第2巻第2期
- 王 建他 1978 「下川文化山西省下川遺址調査報告」『考古学報』1978年第3期
- 賈 藍坡 1978 「中国細石器の特徴和它的伝統、起源与分布」『古脊椎動物与古人類』第16巻第2期
- 賈藍坡他 1972 「山西峙峪細石器時代遺址発掘報告」『考古学報』1972年第1期
- 蓋 培 1984 「陽原石核の動態類型学研究及其工藝思想分析」『人類学学報』第3巻第3期
- 蓋培・衛奇 1977 「虎頭梁細石器時代晩期の遺址の発現」『古脊椎動物与古人類』第15巻第4期
- 蓋培・史石 1977 「黄河の水は江戸に通じる」『人民中国』1977年第10期
- 蓋 培他 1982 「華北と日本における旧石器時代の石器製作技術の比較研究(1)—陽原技術と峠下技法— その1—」『考古学ジャーナル』199号
- 葛治功他 1985 「大賢庄の中石器時代細石器—兼論我国細石器の分期与分布」『東南文化』第1輯
- 周 国興 1974 「河南許昌靈井の石器時代遺存」『考古』1974年第2期
- 徐淑彬他 1986 「山東郟城黒竜潭細石器遺址」『考古』1986年第8期
- 徐 淑彬 1983 「山東臨沂県鳳嶺発現細石器」『考古』1983年第5期
- 常興照他 1987 「山東郟城馬陵山細石器遺存調査報告」『史前研究』1987年第1期
- 曾 騏 1981 「西樵山東麓の細石器」『考古与文物』1981年第4期
- 陳 淳 1983 「中国細石核類型和工藝初探」『人類学学報』第2巻第4期
- 裴 文中 1952 『中国石器時代的文化』
- 李炎賢他 1980 「江蘇省東海県発現的打制石器」『古脊椎動物与古人類』第18巻第3期
- Nelson, N, C, 1926 Discussion And Correspondence Notes On The Archaeology of The Gob-i American Anthropologist vol. 28, nol,
- 補遺 脱稿後に加藤真二 1993 「中国華北の細石刃文化」『シンポジウム1993・10細石刃文化研究の新たな展開』を知った。本稿第4節に関わる内容であるが、今回は検討できなかった。